

O2-001

重症身体疾患を持つ子どものきょうだいのメンタルケア：小児科精神保健班として介入した二症例

勝丸 雅子¹、中村 俊一郎¹、酒井 道子¹、
橋田 典子¹、鶴田 夏子¹、渡邊 久子²¹慶應義塾大学医学部 小児科学教室²LIFE DEVELOPMENT CENTER 渡邊医院

【はじめに】

子どもの重症身体疾患は、健常なきょうだいの精神疾患発症リスクを高める。親が病児のケアに追われる中、健常なきょうだいは「良い子」を演じ、感情を抑圧せざるを得ないことが多い。健常児は、親を独り占めしたいという思いからきょうだいの死を願う瞬間があったり、自らの健康に罪悪感を持つことがある。このような反応は親にとって受け入れにくいものであるため、健常児の心理的变化に対応できないことは多い。我々小児科精神保健班は重症身体疾患を持つ子どもと家族のメンタルケアに積極的に関わっている。きょうだい罹患数年後に心身症を発症した症例A、きょうだいの身体的急性期に積極的に家族に介入し心身症発症を予防し得た症例Bの二例を報告する。

【症例A】

14歳女児、主訴：リストカット・引きこもり。幼少期から父のDVあり。6歳時、兄が白血病を発症。母は兄に病院で24時間付き添い。Aは親戚の家を転々とし、3回転校。その間に両親は離婚した。9歳時、再び母と兄と暮らすようになるも、母に不満を訴えることは全くなかった。14歳時、リストカット・引きこもりとなり入院。「お兄ちゃんは病気だから、私は泣いてはいけないと思っていた。」と初めて自分の思いを語った。乳幼児精神保健的アプローチによる再愛着療法を経て、母との関係性も改善し、現在は健全に社会復帰している。

【症例B】

9歳男児、主訴：盗み。弟が原因不明の脳死状態となりICUに入院。初回両親面接で、両親は「『いつも弟ばかり』と言い、弟のことを思ってくれない。」「ハンデを負っていない兄など今はどうでもいいと思う」と語った。その後兄は学校で問題行動を起こし、母の財布から金を盗むようになった。治療者が両親の気持ちに寄り添いつつ、客観的に見た兄の様子を伝えたことで、両親が兄のありのままの気持ちを受け入れられるようになり、兄の症状は改善した。

【考察】

症例Aは介入開始時にはすでに家族機能不全が長く続いており、治療に時間を要した。症例Bでは急性期からリアルタイムに介入していたことで、迅速に対応することができ、症状は短期間で消失した。子どもの重病は家族全員の危機となる。私たち子どもの治療に関わる者は、常に「家族を診る」という視点を持つことが必要である。きょうだいの持つ自然な感情が受け止められるように両親を支えていくことも、私たち医療チームの大切な役割である。

O2-002

発達障害のある思春期の子どもの養親を対象としたペアレント・トレーニングの効果

古川 恵美¹、石崎 優子²、田邊 敦子³、
山上有紀³、金子 一成²¹畿央大学教育学部²関西医科大学 小児科学講座³公益社団法人 家庭養護促進協会

【背景】

2013年の里親委託児総数は4,534人で、そのうち障害のある子どもは、注意欠陥多動性障害ADHD 3.3%、学習障害LD 0.8%、広汎性発達障害 4.4%であり（児童養護施設入所児童等調査結果2015）発達障害や発達障害の特性をもつ子どもを育てる里親・養親が年々増加している。発達障害の特性をもつ子どもを育てる里親・養親の養育困難感は多大であり、その対応は喫緊の課題である。

【目的】

発達障害のある子どもへの支援の一つとして、ペアレント・トレーニング(PT)が推奨されている。里親・養親がPTを受講し、わが子となった里子・養子に対して具体的な関わり方を学ぶことは養育困難感の緩和につながる。今回、同じ境遇である発達障害のある思春期の子どもの養親グループでPTを実施した効果について報告する。

【方法】

養親を対象とした研修『発達障害のある子どもをほめて育てる』に参加した養親のうち、PTを希望する発達障害のある思春期の子どもを持つ6人を対象とした。PTは全10回、1回90分、基本プラットフォームに基づく内容とした。PTのファシリテーターは筆頭演者が行い、里親・養親を継続的に支援しているソーシャルワーカー2人をサブリーダーとした。研修開始前と終了後に、家族の自信度20項目の記入を求めた。10回終了後にPTで習得したと考えている内容についてグループインタビュー調査を実施した。統計学的解析は研修前後の自信度をt検定を用いて比較した(SPSS Ver. 24)。グループインタビューは約90分で、参加者全員の許可を得て映像で記録し、逐語録と反応を合わせて質的に分析した。

【結果および考察】

PT前後での自信度の変化に有意差は認められなかった(p<0.05)。インタビュー調査は逐語録をデータにした文章から、自身が問題であると捉えている子どもの行動、自身の変化への気づきについて述べられているものを重要アイテムとして拾い出し、その背景要因から重要カテゴリー【わが子を理解すること】を汲み出した。分析の結果、<子どもに過干渉な自身への気づき><客観的にわが子をみることの重要性><親自身の仲間という存在の重要性><親の居場所作り><ほめる判断基準の見直し><わが子に合ったほめ方の習得><子どもの達成感につながる指示の仕方を習得>の7つのカテゴリーが抽出された。社会的養護を必要とする子どもの健やかな発達への効果につながるともいえる里親・養親に特化したPTの重要性が示唆された。